

『検案所』

また一人、身元不明のご遺体が
家族の元へと帰って行
雄叫びのような泣き声とともに。
ありがとうございましたの声に
深々と頭を下げた警察官の肩も震えている。
切ない声が検案所にこだました。

『眠るように』

検案所の冷たいコンクリートの床に
あなたは、物言わず横たわる。
わずか2歳にもならないあなたは、
穏やかな顔で、まるで眠っているようだ。
今にも目を覚ましそうに、
静かに目を閉じている。
検案の手が震える。
とめどなく涙が溢れる。
記録のシゲちゃんも肩を震わせる。
せつない、せつない、あまりに。
神様なんてきつといない。
もしいたら、こんな惨いことをするはずがない。

『午後4時半』

午後4時半、
電気のないこの町に夕暮れが訪れる。
その日の重労働を終えて、
ボランティア達が、
仮の宿へと
疲れきった体を引きずり、
帰って行く。
充実感に満ちた顔は、
汗にまみれている。
額の汗が、光る。
その光りに、
まばゆい日本の将来が、
みえた。

『がれき』

がれき、何と寂しい響きだろう。
そこには、数日前まで
賑わいが、あった。
命あふれる生活が、あった。
いま、残されたのは、
泥にまみれたがれき。
がれきを懸命に片付ける人は、
希望には満ちていない。
そんな人々の口から
出る感謝の言葉、「ありがとう」
きっといつか、キラキラした生活が、戻ってくるに違いない。

『すがって』

津波がすべてを奪った街、
白いコンクリートの固まり、
二階の窓にへばりつく車。
厚みは、3分の1。
何という強大な力だ。
人間は、自然と共存して
生きていかねばならないだと！
何とおこがましい。
人間は、自然にすがって生きているのだ。

『力』

自然の底力、
1人の人間の非力、
赤の他人の協力、
世界の人々の助力、
日本には、魅力、活力、そして底力。

『光る汗』

マグロが、カツオが、いろんな魚が水揚げされて
セリの声に活気のあった市場は、もうない。
今は、ガレキを片付ける重機の音が響く。
売る人、買う人。多くの人でごった返した場所は、
今は、多くのボランティアが一輪車を押して行きかう。
道いっぱいにあったガレキも、今は歩道にあるだけ。
輝く空を見上げたボランティアの頬をつたう汗が光る。

『毎日』

やだぁ！やだぁ！一緒に帰る！
安置所の空気が切り裂けた。
お母ちゃんは・・・
事情を説明する父親の声が上ずる。
もうそれ以上の言葉は、出て来ない。
まだ、2歳にもならない弟は、冷たくなった母の頬を突っついて、
突然、父のもとに泣きついた。
安置所は、悲しい対面が毎日続いている。
あの悲しい場所に、三宅先生はまだ通っているのだろうか？
まだ、あの嗚咽に、胸をえぐられているのだろうか？
私は、あそこに行ってからというもの、涙腺がやたらと緩くなった。

『ああ』

ああ、なんてことだ！
そこには、何も無い。
多くの人びとの毎日があつた、あの場所が。
なんてことだ！
なんにもなくなった。
自分のいる場所が高台と思ひ違いしそうな、
なんにもない。
ああ、なんてことだ！

『ぼくは』

ぼくは、何者でもない。

ただ、素晴らしい、優しい友達に恵まれているだけだ。

だから、いろいろな感動を与えられている。

その感動に動かされているだけだ。

ぼくの周りには、素晴らしい仲間がいる。